

光の花が咲く道

浜松市立湖東中学校 一年 鈴木 陽菜

「真っ白だね。」

あいさつ代わりに掛けられるこの言葉。私は、白人とのハーフで、生まれつき肌の色が白い。初めて会う人も学校の友達も、第一声はみんな同じ。苦笑いしながらも、嫌な気はしない。では、もし私が黒人とのハーフだったら？

一九三九年、ニューヨークのハーレムに、一人の黒人の男が本屋を開いた。彼の名は、ルイス・ミシヨ。この本屋にあるのは全て「黒人のために、黒人が書いた、黒人についての本」。子どもの頃、本屋さんになりたいと夢を膨らませた人もいるだろう。だが、ルイスが本屋を開いたのは、あの有名なキング牧師らが、人種差別のために立ち上がった以前の話だ。私が今、日本で本屋を開くのととはわけが違う。しかも、黒人は本を読まないと言われていた時代に、黒人のための黒人についての本を売ろうなんて！

ルイスが生まれ育った時代、アメリカ南部の黒人は、未だに学校や図書館、バスの席まで分け隔てられ、理不尽な扱いを受けていた。もし私の肌の色が黒いというだけで、大好きな本に触れるチャンスもなかったとしたら、作家になりたいという夢を持つことさえなかっただろう。ぺらんとめくれる魚の皮のように薄い皮膚。その色の違いで、自分の未来の芽に光が当たらなくなってしまうたら、何を頼りにどこへ向かって伸びて行けばよいのか。

私に通っていたアメリカの小学校では、黒人も白人も、メキシコ系、中国系、インド系の子も皆、同じ教室で共に学んだ。友達が何色の肌

で、どこの国の出身かなんて気にもしなかった。教科書には、あらゆる人種の子どもが平等に描かれていて、図書館の絵本には、黒人が主人公の心踊る名作が、数多くあった。それは私にとって当たり前前の光景だった。

そんな日が来るとは思いもよらなかった時代に、ただ一人、五冊の本から己の道を切り開いたルイス。彼にしかない特別なものとは何だったのだろうか。

まず一つには、人並みはずれた行動力。彼は、自分で考える脳と人に伝える口を持っていた。操り人形のままでは、自分が思い描く世界は完成されない。私には、周りからの批判を恐れ、言葉に出すのをためらう心がある。一步を踏み出す勇気が出ず、第一走者となれない弱さもある。ルイスは、突拍子もないことを思いつき、数え切れないほどの愚かな過ちも犯した。原題の“NO CRYSTALSTAIR”が物語る通り、彼の人生は決して水晶の階段ではなかった。しかし、だからこそ、自分で織り成した人生の道は、水晶よりも美しく、生命の輝きを放っていた。

もう一つは、彼を愛し、信じてくれた父親の存在。たとえ罪を重ねても、父は「ルイスは悪い子じゃない」「あいつには見込みがある」と心の中で信じ続けていた。どんな時にも信じてくれる人がいるという心の支えは、その人の笑顔が見たいという願いを生み、逆境を跳ね返す強さになる。自分の夢を実現したり、偉大なことを成し遂げたりした人の陰には、自分を信じ続けてくれた人の存在がある。ルイスが本屋を開こうと決意した時にも、

「道はけわしいだろうが、やってみせる。さもないと、父さんに顔向けできない。」

と、天国の父に背中を押してもらった。私の両親も、私がやると決め

たことを誰よりも応援してくれる。それを糧にして、私も期待に応えようと頑張れる。私を一人の人間として認めてくれる両親の温かさが、私の夢の原動力だ。

そして、ルイスの人生を特別なものにした最後の鍵は、人のために尽くす心。自分の利益や名誉のためではなく、将来を担う黒人一人一人の若者のため、黒人社会全体を照らす道しるべとなるために。ルイスの本屋によって人生が大きく変わった若者の中には、荒くれ少年スヌーズもいた。彼は、詩の一節が原題にもなった「夢の番人」という詩集に感銘を受け、後に青少年指導人になった。父親に医学の本を買ってもらった少年は、立派な医師となって、ルイスとの感動の再会を果たした。ルイスのまいた種は、やがて色とりどりの花をつけ、しっかりと日の光のほうを向いて咲き誇っていた。

二〇〇九年、オバマ氏がアメリカ大統領に就任した。建国以来初の黒人大統領の誕生だ。ルイスの本屋が今もあつたとしたら、彼はきっと万感の思いで、オバマ大統領の本を店頭に並べたに違いない。

長い時を経て、ようやく平等な社会へと歩み始めた今。しかし、黒人、白人、ハーフという枠が、完全に人々の心から消え去った時に初めて、差別が本当の意味でなくなるのだと思う。私は私、他の誰とも違う。私には、二つの国籍以上に特別なものがある。笑われてもいい、気づかれなくてもいい、私にしかできないことで、人を喜ばせられる誠実な生き方をしたい。

書名 ハーレムの闘う本屋 ルイス・ミシヨアの生涯

著者名 ヴォーランダ・ミシヨア・ネルソン

発行所 あすなろ書房